

# 郷土の扉

The gateway to local history

南九州の空の玄関口である鹿児島空港は、今年で開港50周年を迎えました。昭和47(1972)年、鹿児島市鴨池から移転しましたが、移転により霧島市に初めて飛行場ができたわけではありません。今回は、かつて霧島市にあった飛行場を紹介します。

## 市内の飛行場の歴史

市内に飛行場ができたのは、ライト兄弟が有人動力飛行に成功してから21年後のこと。大正13(1924)年、隼人町浜之市に開港した本田飛行場が、市内最初の飛行場です。国分の本田稲



空港公園にある滑走路の破片



第二国分基地跡に広がる茶畑。左手に空港が見える

作が設立した本田飛行学校の飛行場で、海岸の干潟を利用したものでした。飛行学校は大正15(1926)年ごろに解散するまで、練習生の受け入れや各地

# 飛行場今昔

で飛行大会などを行いました。

昭和17(1942)年には、陸上自衛隊国分駐屯地がある場所に、海軍航空隊第一国分基地の建設が始まりました。初めは操縦教育などが行われていましたが、第二次世界大戦で特攻作戦が始まると、作戦に参加する各地の航空隊が集結する前線基地となりました。昭和19(1944)年には、鹿児島空港がある場所に、第二国分基地が建設されました。

昭和20(1945)年、県内の航空基地が米軍の空襲により被害を受けるようになると、秘匿飛行場として福山町牧之原に海軍航空隊牧之原基地が建設されますが、終戦を迎え出撃は行われませんでした。

## 第二国分基地

十三塚原飛行場とも呼ばれた第二国分基地の滑走路があったのは、鹿児島空港の展望デッキ正面から右手にかけて。急ピッチで行われた建設作業には建設業者のほか、県内各地から男女間

わず、住民や学生らが勤労奉仕隊として動員されました。石や砂などを人の手で運び、石を並べ、水は台地の下にある谷川から運ばなければならず、大変な重労働だったそうです。

滑走路が出来上がると、ここから多くの特攻機が沖縄の空へと飛び立ちました。十三塚原の通信指令壕では、「コウゲキニセイコウ、ワレイマヨリタイアタリス」という特攻隊員からの最後の電文を受信しています。第一・第二

基地から飛び立ち戦死した隊員は、427人にも上ります。現在、飛行場の跡には空港や茶畑など平和な風景が広がっていますが、飛行場跡地にある空港公園には滑走路の破片が展示され、当時をしのぶことができます。空港の歴史と共に尊い犠牲があったことを忘れず、平和な日常に感謝しながら過ごしたいものです。

(文責 堀之内)

## 「きりしま博物館めぐり」歴史講座参加者募集

### ■霧島市内の近世麓について

- 日時=9月3日(土) 午前10時~正午(受付=9時30分から)
- 場所=隼人塚史跡館(隼人町内山田287-1)
- 講師=下鶴弘さん(始良市歴史民俗資料館館長)
- 定員=20人 ※申し込み多数の場合は抽選。
- 参加料=300円
- 申込方法=右の申し込みフォームからか、往復はがきに住所、氏名、電話番号を記入の上、郵送
- 申込期限=8月25日(木)午後5時必着

問・申=社会教育課 ☎(64)0708

